

浅羽町の沖積原について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-08-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神間, 貞吉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006033

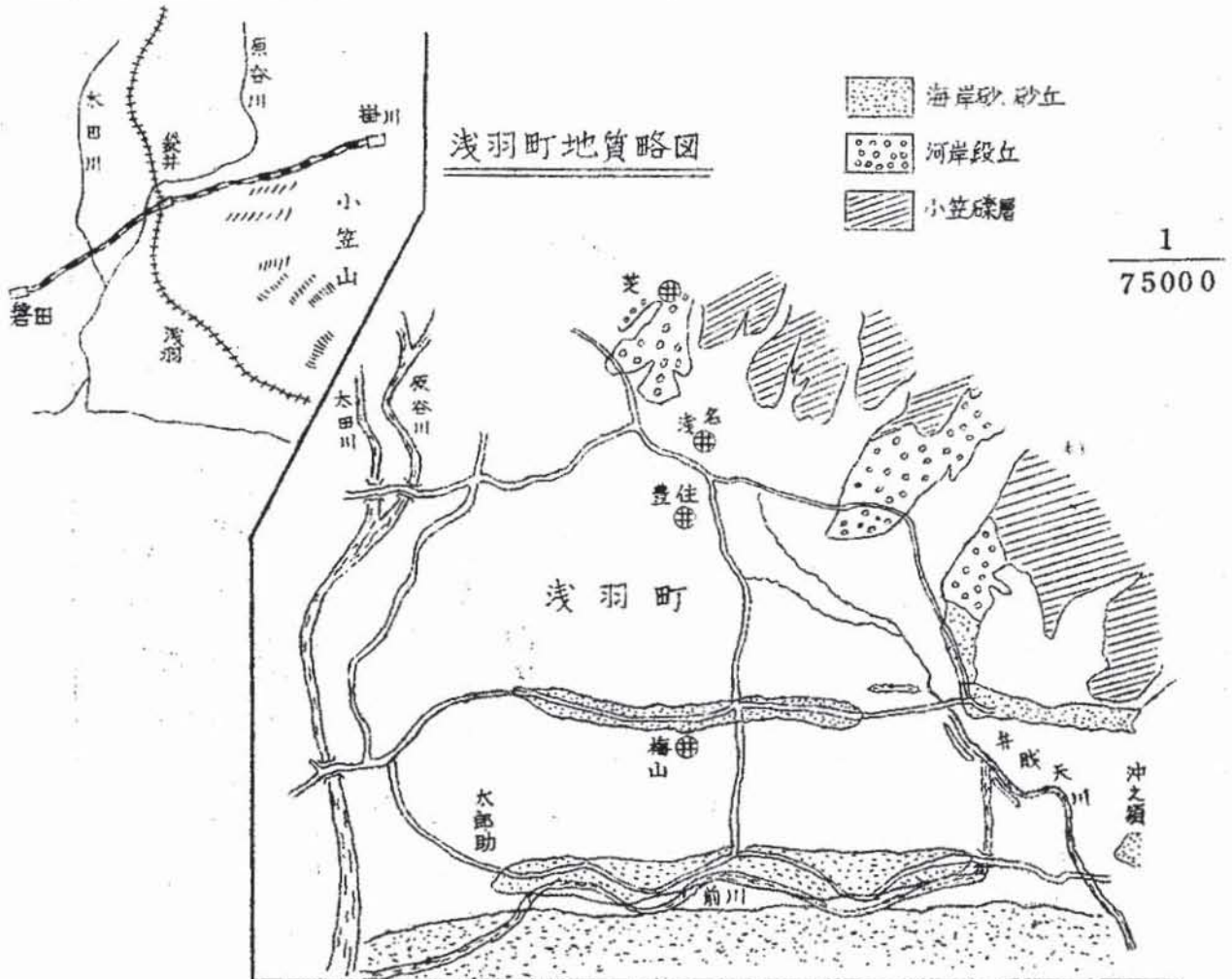
浅羽町の沖積原について

神間 貞吉*

はじめに

磐田郡浅羽町は小笠山塊の西側に位置し、その南部一帯は太田川、原谷川の沖積原によって占められている。この中には小さいラグーンの名残の沼を伴う堀があり、全体として東半部では海拔1m程度しかなく、河口を逆流する海水によって、水田がしばしば冠水している。この小平野は17世紀初頭までは入江として残っていた記録があるし、地質調査所の地質図「見付」の説明書でもこのことについてふれている。

浅羽町の地質はこの沖積原と東側の小笠山塊の洪積台地、その縁の河岸段丘から成っている。最近この沖積原に鑿井がされたので、これを利用して気がついた事を一二記述してみたい。



* 磐田郡浅羽中学校

鑿井されたものゝうちこゝで利用したものは図に示した原谷川の東方小笠山塊との間には南北につながる3個である。この平原の北東部芝附近では比高10m内外の河岸段丘が北西から南東に細長く伸び、沖積原はこれに接するか、小笠山塊と直接するので、小笠山塊以下の地層は見えない。

この沖積原を作る砂礫、砂泥は原谷川、太田川に由来するもので、三倉累層、新第三系の礫から構成される。砂岩、礫岩、珪岩、泥岩や、石英脈の破片などである。

井戸について

A 浅羽町浅名の鑿井柱状図について

こゝでは沖積原の上部が非常に厚い（この附近としては）25mに達する粘土層でおゝわれており、附近の井戸を比較しても全て2,3m内外である。泥土は青灰色細粒で有機物を多く含むのが目立つ。相当長期間（地質年代的な意味でなく）沼地状態にあったと考えられる。その下部には約4mの礫層がある。前述原谷川の礫から成る。この層のほゞ中位から貝化石が産している。これに関しては附近の井戸から産したのもまとめて後述する。この礫層以下は灰青色細粒粘土18m、更に白色粘土30m、その下部は化石産の礫層と同種の礫から構成される礫層6mがあるが、一般に赤褐色を呈していることが特徴で、鍵層として使用出来た。これ以下は再び泥層となるが、鑿井がこれまでゞ、層厚などは不明である。

B 浅羽町豊住の鑿井柱状図について

浅羽町豊住の井戸は前記浅名の井戸の南々西約1Kmの位置にある。

地表よりその下底が約30mにある灰青色粘土層22.8m以外は、最高層厚9mで、一般に0.5~2mでうすい。鑿井の全体の深さは72mでその間の砂礫・泥層は31を数えるから、平均の層厚は2.3m位である。

鍵層となるべき赤褐色層は地表より60m附近に全体で2.7mの砂礫層として見られる。

C 浅羽町梅山の鑿井柱状図について

この井戸は全体で約70m掘られたが、前二者に比較して、海岸砂が35m

を占め、全体の半分に達する。この砂層は貝殻を含んでいるがいずれも小破片で、一番深いのは60mに見られる。

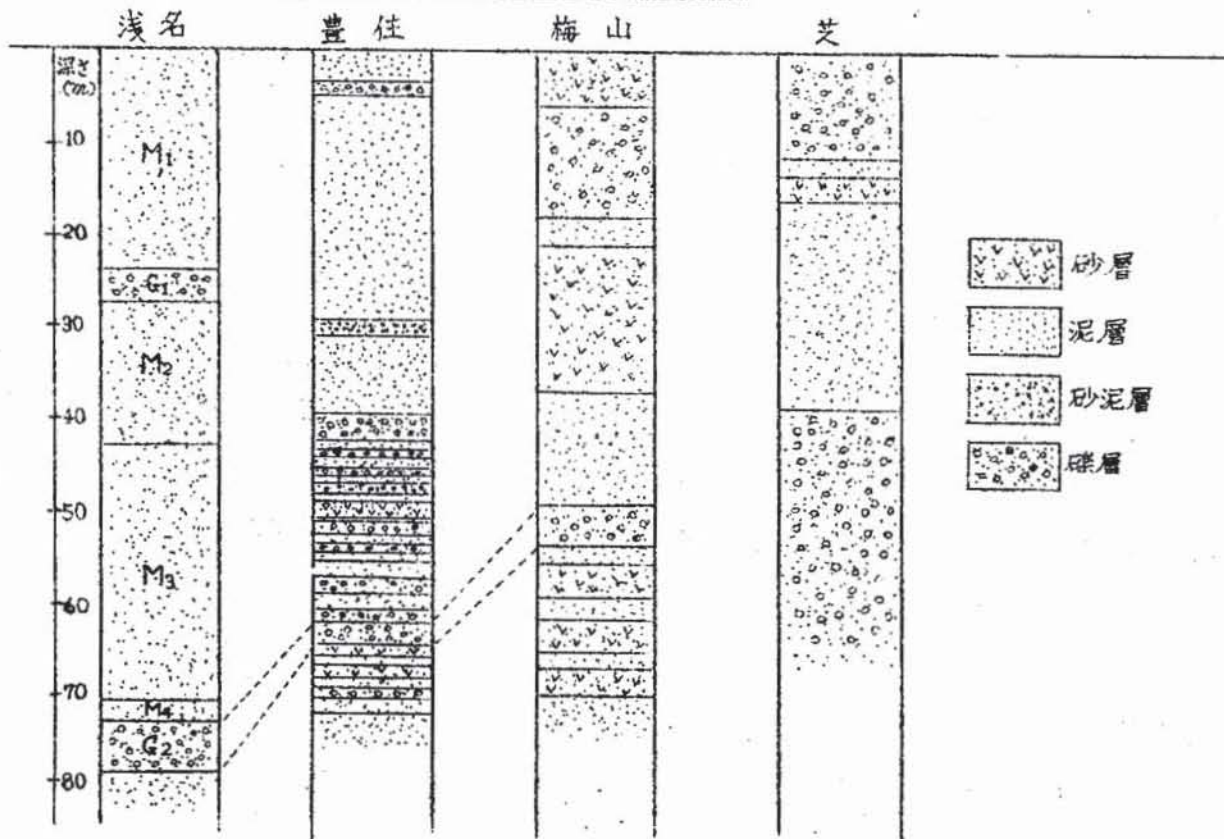
礫層は二層しかないが、上部に12、6mの層があり、下部に鍵層となるべき5.4mの層が挟れる。この赤色礫層は豊住のものより更に高い位置にある。礫種は原谷川のものと同様だが、赤色のチャート、黒雲母花崗岩が含まれていた。

D 浅羽町芝鑿井柱状図について

この井戸は沖積面よりの比高約 m の河岸段丘上に掘られていることゝ、比較的浅いので、前三者とは比較の対称にならないが、ついでにこゝに附記する。

地表より10.8mまで河岸段丘を構成する砂岩、古い泥岩、礫珪岩が粗い砂で満たされた礫層で、黒色の泥板岩片が見立つ、13mで茶褐色の中粒砂層、16mから39mまで青灰色の細砂及び粘土層が続く。これ以下はまた礫層となる。

浅羽町鑿井柱状図



化石

浅名井戸

前述の如く地表より2.5m下4mにわたっての砂礫層より採取されたもの。

- *Anadara (Scapharca) gronosa bisenensis*

SCHEENT et REINHART

- *Cerithidea (Cerithideopsis) cingulata (GMELIN)*
- *Theridium kabelti (DUNKER)*

明確に判定出来るものは以上三種である。

Anadara は砂泥質で干潮線近く、*Cerithidea* は河口泥地の混淡水の部分、*Theridium* も干潮線近く棲息するから、これらの貝化石類はいずれも他生とみななければならない。この浅名井戸以外の附近の井戸から *Anadara* が産しているがこれは柱状図にあてはめるとM2層の上層から7m位置に当る。また比較的数も多いし(散在)破損の程度も少いので運ばれた距離は小さい。他のものとも考え合せて、M2層に由来するものとみて良いだろう。

この他やはり附近の井戸から

- *Corbicula japonica* PRIME
- *Corbicula (Corbiculina) leana* PRIME

も産したが、深さが明確にわからなかった。産状はいずれも他生のようなものである。

豊住・梅山の井戸からも貝化石の小破片が多数産したが、いずれもはっきりわからない。

古地理

浅羽町の沖積原は宝永4年10月の地震によって陸化したと伝えられている。原田和氏の白羽草に依れば、「横須賀港は地盤著るしく隆起の為、爾後次第に浅くなり、港としての価値を失い、浅羽地方干拓の原因をなした。」と残している。

現在知り得る古地図の一つを地形図にあて、書きなおしたものを次に示す。貞享三年のものである。

— 入江の図 —

(貞享三年の古地図による)

地名道路は現在のもの



現在の梅山と五十岡を結ぶ線を最西縁とし、これより南東方に開いて、現在の弁財天川から海と接続していた。しかし、松山北方に橋が見えるところから決して深くなかったらしい。この時代の海岸線は横須賀町沖之須から、中新田を結んだ線と考えてよからう。

ここで、古地図とは別に鑿井柱状図と古砂丘から退去の入江の姿を考えてみたい。

時代は明らかでないが、所謂古噴時代では小笠山の周縁に多くの古噴（または古噴群）が作られたが、この頃の入江は磐田市今ノ浦に続いていた。浅くはあったが、広々とした舟の通れる入江であったらう。

— 古噴時代の入江 —

(X…古噴および古噴群)



浅名井戸のM2層の時代の入江は、その西縁が浅名一松原を結ぶ線よりも西北側にあったが、その距離は小さい。浅名附近では比較的静水で泥土堆積、そこから1kmばかり離れた豊住では泥層がうすく、梅山に於ては泥層と砂層となる。この砂層は前述の如く砂丘のものと思われる。M2層の下部に於ては浅名

井戸では非常にひんぱんに洪水に見舞われている。このとき梅山では泥層の堆積である。この頃の入江の様子を考えてみたのが第6図である。

— 浅名井戸M₁層の時代の入江 —



浅名井戸の最上部M₁層の時代を考えると、そのままの姿で隆起したわけであるが、この時代になると砂丘が出来て入江としての形がはっきりしている。砂丘は海岸線の南下と共に内側から次第に消えて行っているが、現在確認出来る砂丘跡は、松山西々崎を結ぶ線、岡崎から横須賀を結ぶL字形の線に残されている。この外に沖之須—太郎助を結ぶ線にも考えられるが、原谷川の防水工事などでこわされたり、道路工事で平らにされたりしておりはっきりしない。貞享三年のものは先に示したとおりであるが、砂丘を考えに入れてそれよりも少し古い時代を考えてみる。

— 浅名井戸M₁層の時代の入江 —



あ と が き

浅羽町の沖積原について一・二思いついた事を記述したが、正確さを欠く部分があるかもしれないし、書き足りぬ事も多かろうが、お気づきの点はお教え頂きたい。

稿を終えるに当り、いろいろ教示して下さい本校柴田静夫先生に感謝の意を表したい。

参 考 文 献

- ・東浅羽村に於ける地磁気観測結果について

三井地球物理学研究所 越川善明

- ・地質図「見付」と説明書 地質調査所

横山次郎

坂本享

- ・浅羽風土記

美哉堂

原田和

- ・白羽草

原田和